

# いそぼ物語の原典の系統について〔そのⅢ〕

—天草本下巻の成立についての補考—

遠 藤 潤 一\*

What version of Aesop's Fables in Latin was translated into Japanese  
by the Jesuit missionaries in the 16th century? [PART III]  
— Complementary study on the completion of *Esopono*  
*Fabulas* (last volume) —

Jun-ichi ENDŌ

## はじめに

天草本イソポ物語 (*Esopono Fabulas*) の編者はその上巻編集の際に底本とした古活字本祖本 (キリシタン訳本) の外に欧本をも用いていたと推定される。その欧本を上巻の「参考原典」と呼ぶ。その参考原典は天理図書館蔵『*Aesopi Phrygis, et Aliorum Fabulae*』(Lugduni apud Seb. Gryphium, 1542. 以下これを1542年本と呼ぶ) のようなラテン語イソップ寓話集集成本であったと推定される。この1542年本はイソポ伝の題辭が天草本のイソポ伝の題辭とはほぼ同じ内容であり、また、イソポ伝の形式面においても天草本と共通する特徴を備えている。そして、バビロニア王の名「*Lycero*」の綴り字の特徴等も天草本の場合と一致する。また、その寓話部には天草本上巻話25話中の20話の該当話が見出され、その寓話本文も天草本話と同じ内容的特徴を備えていると言える。

一方、天草本下巻は上巻の参考原典として用いられた1542年本のようなラテン語本を原典として新たに翻訳された新訳本であると推定される。1542年本の寓話部には天草本下巻話45話のすべての該当話が見出され、その話順も大体一致するのである。寓話本文も天草本下巻話と同じ内容的特徴を備えていると言える。

筆者は天草本イソポ物語の成立について以上のような見解を拙著『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究・正編；続編』(風間書房刊・昭和58年1月；昭和59年1月。以下「正編」「続編」と呼ぶ) を通じて述べた。しかし、天草本下巻の話順の問題については、「続編」の第Ⅲ部参考資料影印編の解説Ⅱにおいて、

だが、天草本下巻ではどうして「鶏と下女の事」が第1話にならなければならないのかという問題などになると、この1542年本に拠って説明することは難しい。と述べたのであった。これは、1542年本が一面において天草本下巻の原典とは懸け離れた性質を有するののかという問題を残したことを意味するものである。しかし、その後、改めてこの1542年本を用いて天草本下巻の編集過程についての考察を試みた結果、この「鶏と下女の事」が天草本下巻第1話となった理由がこの1542年本を用いても説明できることが

\* 国文学研究室 (昭和59年9月15日受理)



Sebastian Gryphius の1542年本 (天理図書館蔵)

わかった。本稿ではこの事を中心にして、再び1542年本に拠って天草本下巻の編集過程を推測してみようと思うのである。

## 1 1542年本の寓話部

そのためには、まず最初に1542年本の寓話部の構造について概説しなくてはならない。1542年本の寓話部は下記のラテン語イソップの各寓話集の集成によって成っている。

- ① LAVRENTIVS VALENSIS INSIGNI viro Arnoldo Fouelledæ salutem. (33話)
- ② ALIAE ITEM ALIQVOT AESOPI FABVLÆ è Græco in Latinum versæ, incerto interprete. (78話)
- ③ GVLIERMVS CANONICVS DIVI AVRElij Augustini Florentio suo, illustri Baroni Iselsteino. S. D. (45話)
- ④ AESOPI FABVLÆ TRIGINTA sex, Hadriano Barlando interprete. (36話)
- ⑤ ANIANI FABVLÆ QVAtuor, Hadriano Barlando interprete. (4話)
- ⑥ ANIANI FABVLÆ TRIGINTA OCTO, GVlielmo Hermano diui Augustini ordinis canonico interprete. (38話)
- ⑦ AESOPI FABVLATORIS CLARISSimi apologi, è Græco Latini per Rimicium facti. (100話)

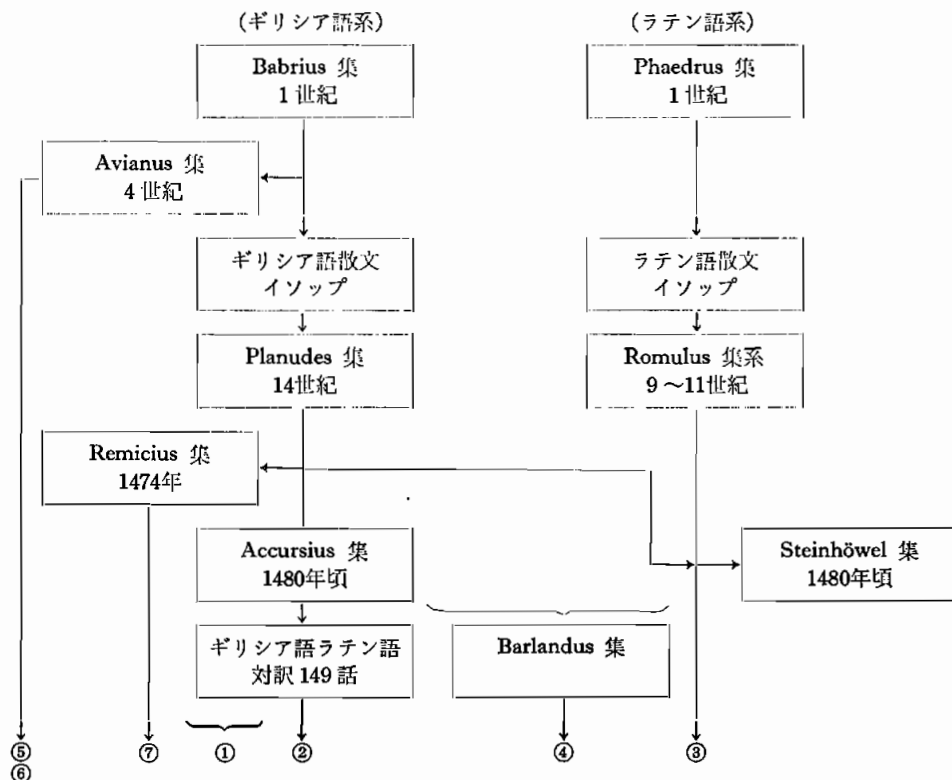
(第⑧寓話集 Absternius 集合計 200 話は省略した)

以上であるが、これら第④寓話集から第⑦寓話集までの系統関係を推測すると〔図1〕のようになる。

イソップ寓話集はその原初的な問題はさて置き、写本の段階以降の見地から言うと、Baburius 集系と Phaedrus 集系とに大きく分けられる。前者はギリシア語系、後者はラテン語系、とも言える。前者からは4世紀に Avianus 集が出る。後者からは9～11世紀に

〔図1〕 1542年本寓話部の各寓話集の系統

(①～⑦は1542年の各寓話集を指す)



Romulus 集系の本が出る。古活字本祖本（キリシタン訳本）の原典であったと推定される Steinhöwel 集（1480年頃）の寓話部の第1寓話集はこの系統のものである。前者からはその後、14世紀に Planudes 集が出、それに拠って15世紀に Remicius (Rimicius) 集と呼ばれるラテン語訳本が出た。同時期に Planudes 集の刊本である Accursius 集が出、その後、そのギリシア語本文にラテン語訳文を併置した対訳本（寓話数149話）が流布することになる（筆者はその本を「対訳149話」と呼ぶ<sup>1)</sup>）。古活字本祖本の原典と推定される Steinhöwel 集は前者・後者の系統の混成本であるが、それもこの15世紀に出た。その後の刊本に大きな影響を及ぼした Remicius 集・Accursius 集・Steinhöwel 集を筆者は15世紀三大刊本と呼びたい。

ところで、1542年本の第⑦寓話集はそれらの中の Remicius 集 100話である。また、第②寓話集はそれらの中の Accursius 集系の対訳 149話のラテン語抄本78話である。Remicius 集は Planudes 集を母胎としたラテン語訳抄本であり、対訳149話も母胎は Planudes 集であるから、両者には共通する寓話がかかり見られる。また、第⑤寓話集・第⑥寓話集は Avianus 集合計42話である。この集は Planudes 集と共に Babrius 集を源泉とするものであるから、Planudes 集系の Remicius 集や対訳149話との間にやはり共通話が見られる。それに対して第③寓話集45話は Phaedrus 集を源泉とする Romulus 集系の寓話集で、系統が前述の諸集とは違う。それ故、第③寓話集と第⑦・②・⑤・⑥寓話集とでは共通話は少ない。残る第①寓話集33話は Remicius 集・Accursius 集系の抄本かと考えられるが、詳細は不明である。第④寓話集36話は第③寓話集すなわち Romulus 集系のような一面も

あるが、大局的に見ると Remicius 集・Accursius 集系の面の方が強いような感もある。この集の詳細も不明と言わざるを得ない。しかし、後述するが、この第④寓話集は第③寓話集、第⑤・⑥寓話集と集成されることが多いようである。

以上が1542年本の寓話部を構成している各寓話集の系統についての概説である<sup>2)</sup>。

## 2 本稿における考察の観点

それでは本論に入り、1542年本を天草本上巻の参考原典、天草本下巻の原典と仮定して、天草本下巻の編集過程についての推論を試みてみよう。

まず、天草本編者が上巻寓話部25話の編集の際に参照したのは参考原典のどの部分であったろうか。それは当然、上巻寓話の該当話が登場する部分、すなわち Romulus 集系の第③寓話集45話であろう。天草本編者がこの種の欧文を参照して、古活字本祖本の原典であった Steinhöwel 集系の一本所収の Romulus 集全4巻80話を参照しなかったらしい事は、上巻第12話「イソポ、アテナスの人々に述べたるたとえの事」の本文末尾部の内容および付加教訓の内容を見ても分かる<sup>3)</sup>。天草本下巻の話数が45話なのは、上巻寓話部編集の際に参照した第③寓話集の45話という数に合わせたからなのではないであろうか。

天草本編者は上巻寓話部の編集において第③寓話集を参照したと推定される。この事は天草本下巻の編集過程を推測する上でもきわめて重要な事となる。天草本編者が下巻寓話部の編集の際にまず用いたのは上巻の参考原典すなわち下巻の原典のどの部分であったかという問題を考える上での一つの手掛かりをこの事が与えてくれるからである。天草本下巻の編集は上巻の編集で用いた第③寓話集の、その直後に置かれていた寓話集、すなわち第④寓話集 Barlandus 集36話に依拠することによって開始されたのではないかと考えることができるからである。実は、天草本下巻第1話「鶏と下女の事」の該当話はこの第④寓話集にあるのである<sup>4)</sup>。それは第④寓話集の第31話である。このことによって、「鶏と下女の事」が天草本下巻第1話となった理由を考える手掛かりがつかめたことになる。次の問題として、それを「理由がつかめた」と言い得るまでに種々の面から裏付けることだけが残されている。

拙著「統編」において指摘したように、天草本下巻の編集は一つの採話過程を2回繰り返していると推定される。そして、2回目の採話過程の最初の話（下巻第28話）「童の羊を飼うた事」、2番目の話（下巻第29話）「鷺と烏の事」がまた第④寓話集の第17話・第18話なのであり、1回目の採話過程の最初の話（下巻第1話）「鶏と下女の事」の場合と出所が一致するということになる。下29話「鷺と烏の事」は拙論「統編」の「追記」で述べたように、該当話は第⑦寓話集にも見出されるが、寓話内容細部の比較から見ると第④寓話集の該当話を挙げた方が適当ということになるのである。また、下28話「童の羊を飼うた事」も第⑦寓話集の該当話よりも第④寓話集の該当話を挙げた方が天草本話との話順の一致が得られるということになるのである。このようなわけで、この両話は第④寓話集から採話されたと考えられることになり、そうすると天草本下巻の編集においてこの下28話「童の羊を飼うた事」から2回目の採話過程に入ったと推定されることになるのである。

なお、1542年本寓話部における第③・④・⑤・⑥寓話集という範囲は寓話部集成上の一つの単位であったように思われる。天理図書館に1517年刊のイソップの一本がある。その本は扉に「FABVLARVM QVAE hoc libro continentur interpretes atq; aut ho res Sunt hi. — IN LIBERA ARGENTINA」, 巻末刊記に「Argentorati, Mense Marcij. Anno a Christo nato. M. D. xvii. FINIS」とあるラテン語本であるが、巻頭には「AESOPI

VITA BREVISSIME: ex Maximo Planude.」と題するイソップ伝梗概を掲げ、寓話部には1542年本の第③寓話集・第④寓話集・第⑤寓話集・第⑥寓話集をこの順序で掲げている<sup>5)</sup>。このように、1542年本以前にこの③～⑥寓話集の範囲が集成上の一つの単位であったと考えられる事に注目しなくてはならない。1542年本は寓話部の中にこの既成の一単位を採り入れているのである。天草本下巻の原典にもこの一単位が採り入れられていたと推定されるのである。

それでは以下、天草本下巻の編集過程を推論する。まず、天草本編者が下巻の編集を第④寓話集に依拠して開始したという観点に立って、1542年本寓話部の①②③④⑤⑥⑦という各寓話集の順序を④⑥⑦①②③の順に並べ変える。そして、⑤は話数が4話だけで、しかも下巻該当話が無いから、実際の検討においては省略する(⑤は実質的には⑥すなわち Avianus 集の補遺である)。それ故、各寓話集の順序は④⑥⑦①②③となる。これを採話の一過程と考える。天草本下巻話の採話はこの過程が2回おこなわれる。1回目の採話過程を(A)とし、2回目の採話過程を(B)とする。以上のような基本的見地に立って1542年本と天草本下巻との寓話対応表を作り変え<sup>6)</sup>、それを次の各部に分けて掲げて、説明を加えてゆきたい。すなわち、(A)(B)共に(ア)部は第④寓話集の該当話の部分、(イ)部は第①寓話集の該当話を中心となる部分、(ウ)部は第②寓話集の該当話を中心となる部分、(エ)部は第③寓話集の該当話の部分、(オ)部は補足的採話の部分である。(オ)部を中心として説明を加えると、天草本下巻話の採話は第④寓話集に拠って始まり、第⑥寓話集の検討を経て、第⑦寓話集は検討せずに(次章以下で言及する)、第①②寓話集の検討に入り、第③寓話集の検討を終えることによって一過程が終了するわけであるが、その一過程が終わった後で第④・⑥・⑦寓話集の範囲から補足的採話がおこなわれたと考えられる節がある。それ故、(A)(B)共に過程が終了した後に(オ)部を設け、そこで補足的採話について説明することにしたのである。次章からは以上の観点から検討した内容について述べてゆきたい。

### 3 天草本下巻前半部の編集過程

前章における観点に立って作表した内容について説明すると以下のようになる。

#### (A・ア) 第④寓話集からの採話

天草本下巻	1542年本					
	④	⑥	⑦	①	②	③
1. 鶏と下女の事	※31				29	

まず(A)表(ア)部の下1話「鶏と下女の事」であるが、これは既に述べたように、第④寓話集 (Barlandus 集) の第31話と対応すると考える。表中の④⑥等は1542年本の第④寓話集・第⑥寓話集等の意。それらの欄中の、たとえば「31」は第④寓話集第31話の意。※印を付した話が天草本下巻話と対応させた話であることを示す。1542年本の寓話本文は拙著「続編」に影印を掲げてある。

次に(A)表(イ)部、すなわち第1回目の採話過程で(ウ)部に引き続き、原典の第①寓話集から採話されたと考えられる部分で、それは天草本下巻第2話から第8話までの範囲である。これは、まず、下2話を第⑥寓話集の第9話と対応させ、下3話から下8話までの6話を第⑦寓話集の該当話と対応させるか、または下2話から下8話までのすべてを第⑦寓話集の該当話と対応させるか、または第①寓話集の該当話と対応させるか等の問題が生ずるが、天草本話・1542年本話の両者の話順が最も一致し、また、寓話選択が狭い範囲においてお

## (A・I) 第①寓話集からの採話

天草本下巻	1542年本→	④	⑥	⑦	①	②	③
2. 二人の知音の事			9	34	※7		
3. 櫓欄と竹の事				37	※8		
4. 大海と野人の事				91	※13		
5. 炭焼きと洗濯人の事		8		19	※17		
6. 病者と医師の事				73	※11		
7. 陣頭の貝吹き の事				46	※9		
8. 母と子の事				90	※31		

こなわれたと説明できる第①寓話集の場合を挙げるのが合理的であろう。

しかし、下2話を第⑥寓話集の第9話と対応させる事も考えられないわけではない。天草本編者が下1話「鶏と下女の事」を第④寓話集から採話した後で、順序に従って第⑥寓話集を検討したとも考えられるからである。

次に、下5話を第④寓話集の第8話と対応させる事も考えられないわけではない。天草本編者が下4話を第①寓話集から採話した後で、また採話の起点である第④寓話集に戻って下5話を採話し、再び第①寓話集から下6話以下を採話したと考えた方が、天草本話と第①寓話集話とのこの辺り(下5話～下7話)の話順の不一致の原因を説明しやすいからである。すなわち、天草本編者が下5話を第④寓話集から採話した後で、再び下4話を採話した第①寓話集の第13話の辺りに戻って下6話(①の第11話)、下7話(①の第9話)を採話したものととも考えられるからである。

ところで、大きな問題点は、天草本編者が第⑦寓話集を選ばずに第①寓話集を選んだと考える点にあるが、それは第⑦寓話集 Remicius 集100話よりもその系統の抄本つまり精選本とも言ってもよい第①寓話集33話を採話範囲として選んだと考えたわけである。なぜならば、仮りにこの天草本下巻話7話のすべてが第⑦寓話集から採話されたとする、下2話は第⑦寓話集の第34話、下3話が第37話、下4話が第91話、下5話が第19話等々ということになり、採話範囲がたいそう広がる。100話中から7話をとというと、平均すると約14話に1話の割合となる。それに対して第①寓話集33話から7話の場合は約4、7話に1話の割合となるわけである。

古活字本祖本(キリシタン訳本)とその原典であった Steinhöwel 集系の一本との間では、寓話は何話に1話の割合で採話されたのであろうか。それを古活字本と Caxton 集との間で推定すると次のようになる<sup>7)</sup>。

(Caxton 集)	(古活字本)	(割合)
Romulus 集全4巻80話	32話	2.5
Extravagantes 集抄17話	9話	1.9
Remicius 集抄17話	6話	2.8
Avianus 集抄27話	8話	3.4
Alphonsus 集抄13話	2話	6.5
Poggius 集抄7話	2話	3.5

この全体を平均すると約3話に1話の割合ということになるのである。

また、天草本上巻話25話は古活字本祖本から何話に1話の割合で採話されたのであろう

か、天草本上巻25話が見出せる古活字本の範囲には38話がある。その中から25話ということは、約1.5話に1話の割合ということになるのである<sup>9)</sup>。第①寓話集33話には天草本下巻話の該当話は全部で11話あるから、平均すると約3話に1話の割合となり、天草本上巻話の場合の1.5話に1話の割合に近くなる。それに対して、第⑦寓話集100話中の天草本下巻該当話は全部で14話であるから、それは約7話に1話の割合ということになり、それに加えて話順の対応という点でも問題点が多くなるのである。

## (A・ウ) 第②寓話集からの採話

天草本下巻	1542年本→	④	⑥	⑦	①	②	③
9. 鶏と犬の事						※3	
10. 獅子王と熊との事						※4	
11. 食欲な者の事						※10	
12. 驢馬と狐の事						※62	
13. 馬と驢馬との事	7				※21		
14. 二人同道して行く事						※32	
15. 野牛と狼の事						※43	
16. 驢馬と獅子の事						※16	
17. 蜜作りの事						※34	
18. 烏と鳩の事						※50	
19. 蠅と獅子王の事						※78	

次に(A)表(ウ)部、すなわち第1回目の採話過程で(イ)部に引き続き、原典の第②寓話集から採話されたと考えられる部分で、それは天草本下巻第9話から第19話までの範囲である。まず、下9話は第②寓話集78話中の第3話である。また、本話の前の下8話「母と子の事」は第①寓話集33話中の第31話であるから、原典における下8話の原話と下9話の原話との間には4話の空白しか無いことになる。

第②寓話集78話はギリシア語ラテン話対訳149話のラテン語抄本である。その対訳149話はPlanudes集の刊本であるAccursius集の系統のものであるから、第②寓話集は16世紀以降の代表的イソップ寓話集の抄本すなわち精選本ということになる(ラテン語文のみを独立させた本であるから、その意味では一般化を目指した本と言える)。この(ウ)部では78話中に天草本下巻話の該当話10話ということであるから、約8話に1話の割合ということになるが、天草本下巻全体には18話の該当話があるから、その平均は約4話に1話の割合ということになる。天草本下巻話の該当話が最も多く見出せるのがこの第②寓話集なのである<sup>9)</sup>。

ところで、この(ウ)部の問題点は下13話「馬と驢馬との事」にある。本話は第②寓話集には該当話が見出されない。該当話は第①寓話集および第④寓話集に見出されるのである。そこで、天草本編者はこの下13話の前の下12話「驢馬と狐の事」を第②寓話集の末尾部(第62話)から採話した後で、何らかの理由で第①寓話集か、または④寓話集に採話の手を戻したものと考えられることになる。第①寓話集に採話の手を戻したと考えるよりも、下巻の採話の起点である第④寓話集に採話の手を戻したと考える方がよいのかも知れない。なぜならば、同様に考えられる(イ)部の下5話「炭焼きと洗濯人の事」の場合などもあるか

らである。しかし、この下13話の場合には別の見地からの大きな問題がある。それについては(B)表の(ウ)部において述べよう。

また、下16話・下17話は第②寓話集の該当話との間に話順の不一致の問題があるが、それは問題として残さざるを得ない。

下19話「蠅と獅子王の事」は第②寓話集の第78話に対応するが、その第78話が第②寓話集の最終話である。

(A・エ) 第③寓話集からの採話

天草本下巻	1542年本→	④	⑥	⑦	①	②	③
20. 盗人と犬の事							※19
21. 老いた犬の事							※22
22. 蝮と小刀の事							※37
23. 山と杣人の事							※39
24. 狐と鼯の事							※44

次は(A)表(ウ)部、すなわち第1回目の採話過程で(ウ)部に引き続き、原典の第③寓話集から採話されたと考えられる部分で、それは天草本下巻第20話から第24話までの範囲である。これらの5話はすべて第③寓話集だけに該当話が見出され、話順についても問題は無い。天草本編者の採話の手は第②寓話集からこの Romulus 集系の第③寓話集に移り、その45話の中から天草本上巻話と重複しないこれらの5話を採ったものと考えられる。45話から5話で、9話に1話の割合となるが、上巻寓話該当話20話を除くと25話から5話で、実際には5話に1話の割合となる。また、第③寓話集の該当話は全部で10話あるから、25話から10話ということで、その平均は2.5話に1話の割合ということになる。

下24話は第③寓話集45話中の第44話に対応する。

(A・オ) 補足的採話

天草本下巻	1542年本						補足的採話		
	④	⑥	⑦	①	②	③	④	⑥	⑦
25. 亀と鷲の事					12			※2	
26. 漁人の事									※25
27. 野牛の子と狼の事						※24			

次は(A)表(ウ)部、すなわち第1回目の採話過程(ア～エ)の終了後、原典から補足的・散発的に採話されたと考えられる部分で、それは天草本下巻第25話から第27話までの範囲である。第③寓話集の次の第④寓話集に拠って始まった天草本編者の下巻話採話は第③寓話集45話中の第44話、すなわち下24話「狐と鼯の事」の採話によって、④⑥①②③という第1回の採話過程が終ったということになる。そして、再び第④寓話集からの採話、すなわち下28話「童の羊を飼うた事」の採話に始まる第2回目の採話過程に入ることになるのであるが、その間に一つの問題があるのである。それがこの下25話から下27話までの3話の問題なのである。まず、下25話・下26話の2話は第④～⑦寓話集の範囲から散発的に採話されたかのような感がある。下25話は第⑥寓話集の第2話に該当する。第②寓話集の第12話とも該当すると言えるが、寓話内容の細部において天草本話と一致しない点があるとい



うことは拙著「続編」の「追記」で述べた通りである。次に、下26話は第⑦寓話集の第25話に該当する。しかし、この下26話の場合には別の見地からの大きな問題がある。それについては(B)表(㌶)部において述べよう。次に、下27話は第⑨寓話集の第24話に該当する。これら3話のこのような対応関係を見ると、下26話の場合は除くとしても、やはり補足的・散発的な採話がされたと考えられる点があることは否めない。これらの採話は第2回目の採話過程に入る前の過渡的なものと考えられるのである。

天草本編者は下巻の話数についても当然どこかで検討したはずである。上巻の話数25話というのも一つの尺度として意識していたであろうと考えられる。それについて注目したいのは(A)表(㌵)部の最後の下24話「狐と鼬の事」である。その該当話は第⑨寓話集45話中の第44話である。この下24話あたりが天草本編者にとって下巻編集上の一つの段落であったのではなからうか。このあたりで話数についての検討が加えられ、この(㌶)部の補足的採話がなされ、その採話も第⑨寓話集45話中の第24話を下27話「野牛の子と狼の事」として締めくくられ、そして、採話の統行という方針が確認されて第2回目の採話過程に入ったのが第④寓話集からの下28話「童の羊を飼うた事」あたりからではないかと考えられるのである。

#### 4 天草本下巻後半部の編集過程

次に(B)表すなわち第2回目の採話過程についての検討に移ろう。

##### (B・ア) 第④寓話集からの採話

天草本下巻	1542年本					
	④	⑥	⑦	①	②	③
28. 童の羊を飼うた事	※17		53			
29. 鷺と鳥の事	※18		(2)			

(A)表(㌶)部に対応するのがこの(B)表(㌶)部であり、そこには下28話・下29話の2話がある。この2話の問題は既に述べた通りである。すなわち、下29話の該当話は第⑦寓話集にも見出されるが、寓話内容の細部においてそれは天草本話とは一致しない。また、下28話の該当話は第⑦寓話集にも見出せるが、第④寓話集の該当話を採った方が天草本話との話順の一致が得られるということである。この2話は第④寓話集の第17話・第18話と対応させるのが最も無理の無い考え方であり、そうすると、天草本編者は下28話から再び第④寓話集に拠る採話を開始したと考えられることになるのである。そして、天草本下巻全体から見れば、(A)表の採話に対してこの(B)表の採話はそのすべてが補遺的採話であると言ってよいことになるのである。

##### (B・イ) 第①寓話集からの採話

天草本下巻	1542年本→	④	⑥	⑦	①	②	③
30. 狐と野牛の事				5	※1		
31. 百姓と子どもの事		6		31	※4		

次に(B)表(㌶)部、すなわち第2回目の採話過程で(㌶)部に引き続き、原典の第①寓話集から採話されたと考えられる部分で、それは天草本下巻第30話・第31話の範囲である。下30話は第⑦寓話集の第5話よりも第①寓話集の第1話の方に寓話内容の細部において一致す

る<sup>10)</sup>。そうすると、下31話は第⑦寓話集の第31話と対応させるよりも、第①寓話集の第4話と対応させた方が話順において自然であると言えることになるのである。

しかし、気になるのは次の点である。すなわち、この下31話の場合には第④寓話集にも該当話があるが、こうした関係となるのは(A)表(i)部の下5話「炭焼きと洗濯人の事」の場合と同じなのである。この下31話の第④寓話集の該当話は第6話であるが、(A)表(i)部の下5話の該当話は第④寓話集の第8話であり、その間には1話の空白しか無い。第④寓話集の両話を含む頁が天草本下巻の原典では第①寓話集のこの部分に乱丁で入っていたのかという事も考えられるかも知れないのである。15世紀・16世紀の本に接した筆者の経験から言うと、それらには落丁・乱丁が意外に多い。しかし、(A)表(i)部の下5話の場合だけを考えるならば、それを乱丁によるものと考えない方が下5話以下の話順の乱れを説明するのに都合がよいのかも考えられるのである。つまり、このような問題が残るのである。

(B・ウ) 第②寓話集からの採話

天草本下巻	1542年本→	④	⑥	⑦	①	②	③
32. 尾長鳥と孔雀の事		26				※6	
33. 鹿と子の事						※9	
34. 片目な鹿の事						※13	
35. 鹿と葡萄の事						※15	
36. 蟹と蛇の事						※20	
37. 女人と大酒を飲む夫の事						※23	
38. パストルの事		12		30	※23		
39. 驢馬と狐の事						※65	
40. 狼と子を持った女の事			1			※77	

次は(B)表(u)部、すなわち第2回目の採話過程で(i)部に引き続き、原典の第②寓話集から採話されたと考えられる部分で、それは天草本下巻第32話から第40話までの範囲である。(A)表(u)部の場合と同じように、この(B)表(u)部も第②寓話集からの採話が中心となる部分であるが、(A)表の下13話「馬と驢馬との事」の場合と同じ問題がこの(B)表にもある。それは下38話の問題である。この下38話は第②寓話集に該当話が見出されない。その該当話は第①寓話集・第④寓話集、そして第⑦寓話集に見出されるのである。これはまた前述の(B)表(i)部の下31話「百姓と子どもの事」の場合とも通ずる問題点なのである。(A)表の下13話とこの(B)表の下38話とは第①寓話集の第21話と第23話という関係になり、その間には1話の空白しか無い。天草本下巻の原典ではもしかしたら第②寓話集のこの部分に第①寓話集の両話を含む頁が乱丁で入っていたのかも知れない、とまず考えられるのである。下巻採話の起点である第④寓話集に戻っての採話と考えられないこともないが、第①寓話集における両話の位置を考えると乱丁をまず考えたくないのである。第⑦寓話集の該当話第30話は無視してよいと思う。

下32話は第④寓話集にも該当話があり、下40話は第⑥寓話集にも該当話がある。しかし、この(u)部の全体から見ると、第②寓話集の該当話を挙げた方が採話の一貫性が保たれる。下40話の第②寓話集該当話は第77話であり、それは第②寓話集78話中の最後から2番目の話である(最終話は(A)表(u)部末尾の下19話に対応する)。この点から見ても下40話は第②

寓話集の該当話を挙げる方が自然なのである。

(B・エ) 第⑨寓話集からの採話

天草本下巻	1542年本→	④	⑥	⑦	①	②	③
41. 蛙と鼠の事							※3
42. ある年寄った獅子王の事							※12
43. 狐と狼の事							※35

次は(B)表(㌸)部、すなわち第2回目の採話過程で(㌸)部に引き続き、原典の第⑨寓話集から採話されたと考えられる部分で、それは天草本下巻第41話から第43話までの範囲である。問題点は無い。

(B・オ) 補足的採話

天草本下巻	1542年本						補足的採話		
	④	⑥	⑦	①	②	③	④	⑥	⑦
44. 老人の事									※28
45. 獅子と狐の事						※43			59

次は(B)表(㌸)部、すなわち第2回目の採話過程(ア～エ)の終了後、原典から補足的・散発的に採話されたと考えられる部分で、それは天草本下巻第44話・第45話(最終話)の範囲である。(A)表(㌸)部には下25話～下27話という3話の変則的採話とも言える問題があったが、それと対称的なのがこの(B)表(㌸)部の下44話・下45話の問題なのである。第⑦寓話集のみに該当話がある下44話は(A)表(㌸)部の下26話「漁人の事」の場合と同じである。下44話と(A)表の下26話とは共に第⑦寓話集にしか該当話の求められない寓話である。その該当話は、前者の場合は第⑦寓話集の第28話、後者の場合はその第25話という関係になり、その間には2話の空白があるだけである。どうして(A)表・(B)表のこの部分に第⑦寓話集 Remicius集100話から1話ずつの該当話が出なければならないのであろうか。天草本下巻話45話の中で第⑦寓話集の該当話を挙げてその対応関係を説明しなければ説明ができないのはこの2話だけなのである。どうして第⑦寓話集100話という広い範囲からこの2話だけが、しかもこの(㌸)部という部分で採話されなくてはならなかったのであろうか。一方、この2話の登場には上述のような第⑦寓話集における位置という問題点が指摘できるのである。第⑦寓話集のこの2話を含む頁が第③寓話集の当該部分に乱丁で入っていたのかと考えたくなるところである。そして、もしそうであるとすれば、第⑦寓話集100話中から2話という不自然な採話の問題は解決する。すなわち、天草本下巻の採話は第⑦寓話集 Remicius集100話とは実際に無関係であったと考えることができることになるのである。

下45話は第⑨寓話集の第43話と対応させるのが自然であろう。(㌸)部からの採話の流れを見ると、第⑨寓話集45話の末尾部からこの第43話を採って天草本下巻の編集を締めくくったと考えることができるからである。この下45話の問題は(A)表(㌸)部末尾の下27話「野牛の子と狼の事」の場合と同じなのである。(A)表(㌸)部も第⑨寓話集からの話で終わっているのである。天草本下巻の編集過程は第④寓話集に拠って始まり、第⑥・①・②寓話集を経て第③寓話集に拠って終わると言うことができるのである。

天草本下巻の45話という話数について、筆者は、天草本編者が上巻寓話部の編集の際に参照した第⑨寓話集45話に合わせたのではないかと本稿第1章で述べたのであるが、下巻



## 5 天草本下巻の内部に見える徴証

以上は1542年本を天草本下巻の原典と仮定しての推論に過ぎないものかも知れないが、一方において、天草本下巻の編集過程が大きく2回に分けることができるというその最も重要な点を示唆する特徴が、実は天草本下巻自体にも存在するというところに注目しなくてはならないであろう。それは、下巻話各話の長短に表れているある傾向である。天草本下巻は下1話「鶏と下女の事」から下13話「馬と驢馬との事」あたりまでは比較的長い寓話が登場するが、その後は短い寓話が目につくようになり、下22話「蝮と小刀の事」から下29話「鷲と鳥の事」あたりには特に短い寓話が目立つ。そして、その下29話が天草本下巻話中の最も短い寓話で、その「下心」（付加教訓）を除いた寓話本文（ローマ字原文・以下同様）はわずか5行である<sup>12)</sup>。ところが、その次の下30話「狐と野牛の事」からは再び長い寓話が登場するようになる。その下30話の寓話本文（付加教訓部を除く、以下同様）は20行にも及ぶのである。そして、この下30話以下はそれ以前と比較すると長短の差はあ

〔表2イ・ロ〕 天草本話と1542年本話との行数の比較

〔イ〕 全例

(A)					(B)					
	天草本 下巻話	天草本話 の行数	1542年本 話の行数	両者の差		天草本 下巻話	天草本話 の行数	1542年本 話の行数	両者の差	
ア	1	10.5	7.0	3.5	ア	28	7.0	4.0	3.0	
イ	2	15.0	11.5	3.5	イ	29	5.0	4.0	1.0	
	○ 3	13.0	7.0	6.0		イ	30	20.0	15.5	4.5
	◎ 4	21.0	9.5	11.5	○ 31	31	17.5	12.0	5.5	
	5	9.5	5.0	4.5	ウ	◎ 32	17.5	4.0	13.5	
	6	14.0	10.0	4.0		○ 33	33	13.0	5.5	7.5
	○ 7	13.0	8.0	5.0		34	34	10.0	6.5	3.5
	◎ 8	26.0	13.5	12.5		○ 35	35	12.0	7.0	5.0
	ウ	○ 9	16.0	9.0		7.0	○ 36	36	15.0	7.0
10		10.5	8.0	2.5		37	37	15.0	13.0	2.0
◎ 11		21.0	11.0	10.0		○ 38	38	16.5	7.0	9.5
12		8.5	5.0	3.5		○ 39	39	15.5	7.5	8.0
○ 13		15.5	9.0	6.5	○ 40	40	14.0	8.5	5.5	
14		9.5	7.0	2.5	エ	41	10.0	7.5	2.5	
○ 15		12.0	7.0	5.0		42	42	10.0	9.0	1.0
16		12.0	8.0	4.0		43	43	13.5	9.0	4.5
17		8.5	6.5	2.0	オ	44	9.0	5.0	4.0	
18		7.0	8.0	1.0		○ 45	45	19.0	13.0	6.0
19		12.0	11.0	1.0	エ	◎ 20	14.0	4.0	10.0	
エ	21	13.5	9.0	4.5		21	21	13.5	9.0	4.5
	○ 22	8.5	3.5	5.0		○ 22	22	8.5	3.5	5.0
	23	9.0	5.5	3.5		23	23	9.0	5.5	3.5
	24	6.0	5.5	0.5		24	24	6.0	5.5	0.5
	オ	25	8.0	4.0	4.0	25	25	8.0	4.0	4.0
26		10.5	8.5	2.0	26	26	10.5	8.5	2.0	
27		8.5	6.0	2.5	27	27	8.5	6.0	2.5	

## 〔ロ〕 平均

(A)

(B)

	天草本話 の行数	1542年本 話の行数	両者の差	順位			天草本話 の行数	1542年本 話の行数	両者の差	順位	
				天草	1542					天草	1542
ア	10.5	7.0	3.5	3	3	ア	6.0	4.0	2.0	5	5
イ	15.9	9.2	6.7	1	1	イ	18.8	13.8	5.0	1	1
ウ	12.1	8.1	4.0	2	2	ウ	14.3	7.3	7.0	2	4
エ	10.2	5.5	4.7	4	5	エ	11.2	8.5	2.7	4	3
オ	9.0	6.2	2.8	5	4	オ	14.0	9.0	3.0	3	2

まり目立たないと言えるが、それでも次第に短い寓話が登場するようになるという傾向を有しているのである。下29話「鷲と鳥の事」を境として、その前半・その後半の寓話の長から短へという傾向は、天草本下巻の編集過程が大きく2回に分けられると推定される面（1542年本との比較によって推定される面）と平行している。そこで、天草本下巻話と1542年本の該当話との長短の比較をしてみると、その結果は〔表2イ・ロ〕のようになるのである（両本共に小型八つ折り版で、天草本は11×17cm、1542年本は11×16cm、1頁分の行数は天草本は24行、1542年本は29行）<sup>13)</sup>。

〔表2イ〕を要約（平均）すると〔表2ロ〕のようになる。まず、〔表2イ〕を見ると、前述の下1話「鶏と下女の事」から下13話「馬と驢馬との事」までは13話あるが、この間の天草本話の寓話本文の平均が14.9行、1542年本話の寓話本文の平均が8.7行となる。次の下14話「二人同道して行く事」から下21話「老いた犬の事」までは8話あるが、この間の天草本話の平均が11.1行、1542年本話の平均が7.6行となる。次の下22話「蝮と小刀の事」から下29話「鷲と鳥の事」までは8話あるが、この間の天草本話の平均が7.8行、1542年本話の平均が5.1行となる。つまり、天草本話の平均が14.9行から11.1行となり、さらに7.8行となる事に平行して、1542年本の該当話の平均も8.7行から7.6行となり、さらに5.1行となるのである。そして、天草本下巻話中最短の下29話は5行であるが、その1542年本の該当話の場合も4行で、最も短い例に属している（最短例は3.5行）。また、その次の下30話は20行となるが、その1542年本の該当話の場合も15.5行となる。下30話およびその1542年本の該当話は下29話およびその1542年本の該当話の約4倍とも言えるのである。

次に〔表2ロ〕を見ると、(A)表では第①寓話集に該当話の求められる(イ)部の寓話本文の平均が15.9行となり、最も長い。そして、それは1542年本の該当話の寓話本文の場合にも言えることであり、平均は9.2行と最も長いのである。次に、第②寓話集に該当話の求められる(ウ)部の寓話本文の平均が12.1行となり、2位となる。1542年本の場合も同じで、8.1行となり、2位となる。(B)表の場合は天草本と1542年本との間で2位・3位の順が違いますが、大体の傾向は(A)表の場合と同じと言ってよいであろう。

このように比較してみると、天草本下巻話の、下29話を境としての前半部・後半部における寓話本文の長から短への傾向は原典および編集過程を反映したものと考えざるを得なくなるのである。

なお、〔表2イ〕において◎印を付した天草本下巻話は1542年本の該当話より10行以上長い話、○印を付した話は5行以上長い話である（計19話）。これらには日本的潤色が増えられたことによって寓話本文が長くなった場合も当然考えられるであろう。日本的潤色と思われる例を挙げてみよう。

(下4話) ある時、野人、海辺に出て、海の緑のなごやかなを見れば、あまたの廻船が東から西に行くもあり、鷗のいさごに印を刻むもあり、絵にかくとも、筆にも及ばぬ景気に乗じて、——

(下32話) 諸鳥、一所に集まって、評議して言うは、「世の中のものを見るに、帝王を持たぬ一類は無いに、けだものに劣らう子細は無い。いざさらば、この諸鳥の中より、才智 (faichi) 良く、芸、他に勝られた仁体を、高賤にかかわらず、今日より鳥の王と仰ぎ用ようずる」と言えは、——

これらはほんの一例である (読点の位置は原文と異なる場合もある)。

## おわりに

天草本下巻話を原典の見地から説明できる基本的な寓話集は、1542年本の場合で言うと、その第①寓話集 (Remicius 集・Accursius 集系の一抄本?) である、

LAVRENTIVS VALENSIS INSIGNI viro Arnolde Fouelledæ salutem. (33話)

そして、第②寓話集 (Accursius 集系の対訳149話のラテン語抄本) である、

ALIAE ITEM ALIQVOT AESOPI FABVLæ è Græco in Latinum versæ, incerto interprete. (78話)

そして、第③寓話集 (Romulus 集系的一本) である、

GVLIERMVS CANONICVS DIVI AVRELIJ Augustini Florentio suo, illustri Baroni Iselsteino. S. D. (45話)

そして、第④寓話集 (Barlandus 集) である、

AESOPI FABVLAE TRIGINTA sex, Hadriano Barlando interprete. (36話)

である。天草本下巻話の該当話は第①寓話集に11話、第②寓話集に18話、第③寓話集に10話、第④寓話集に3話で、この4種の寓話集によって下巻話45話中の42話の該当話が挙げられるのである。そして、話順その他の問題も大体説明できるのである。

残りの3話は、第⑤寓話集 (Avianus 集) である、

ANIANI FABVLAE TRIGINTA OCTO, GVlielmo Hermano diui Augustini ordinis canonico interprete. (38話)

に1話、第⑦寓話集 (Remicius 集) である、

AESOPI FABVLATORIS CLARISsimi apologi, è Græco Latini per Rimicium facti. (100話)

に2話が挙げられるが、話順その他で多少問題が残る。

しかし、大局的に見ると、寓話部にこれらの寓話集を擁し、また、上巻の参考原典としての役割をも説明できるこの天理図書館蔵1542年本、すなわち『Aesopi Phrygis, et Aliorum Fabulae』(フリギア人イソップおよびその他の寓話)のような本が天草本下巻の原典ではなかったのかと筆者は思うのである。

以上

(昭和59年9月2日稿)

## 注

1. 奈良大学紀要第12号(昭和58年12月)の「いそば物語の原典の系統について〔そのⅡ〕」に天理図書館蔵1534年本における天草本下巻該当話の影印を掲げた。
2. 拙著「続編」第Ⅲ部の解説参照。
3. 拙著「続編」第Ⅰ部研究編の第2章第(5)節参照。

4. 第②寓話集にも該当話があり、拙著「続編」ではその第②寓話集の該当話と対応させた。本稿においてそれを改める。
5. また、天理図書館に『AESOPI PHRYGIS ET ALIORVM FABVLAE. — BASILEAE EX OFFICINA IO. HERVAGII. ANNO M. D. XXXIII.』というラテン語本がある。この本の前半部は1517年本の構成と同じであり、その後半部に1542年本の第⑥寓話集・第①寓話集・第⑦寓話集・第⑧寓話集がこの順序で続く。それ故、この1534年本は、イソップ伝を梗概で掲げるといふ点および寓話部を構成する各寓話集の配列が異なるという点を除くと、あとは1542年本と同じと言えるのである。
6. 拙著「続編」の16頁の〔表2〕および492頁の〔表2〕を作り変える。
7. 拙著「正編」の49頁の〔表3〕および「続編」の22頁の〔表3〕参照。
8. 上注参照。なお上14話「狼と豚の事」は古活字本に該当話が見出せないという問題点がある。
9. この第②寓話集の原典すなわちギリシア語ラテン語対訳149話には32話の下巻該当話が見出せる。本稿の注1参照。
10. 拙著「続編」第I部研究編の第1章第(3)節参照。
11. 拙著「続編」第III部参考資料影印編参照。
12. 付加教訓部は一般的に編者の手が加わりやすい部分なので、この比較の際には省略した。
13. 1542年本の本文は拙著「続編」第III部参考資料影印編参照。

### Summary

*Esopono Fabulas*, the oldest printed Japanese Aesop's Fables, which was published by the Jesuit missionaries in Amakusa, Japan, in 1593, is at present owned by the British Museum. That is the only original text known to be in existence today. In this paper, the author compares once again its last volume with *Aesopi phrygis et Aliorum Fabulae*, which is in the collection of the Tenri Library. It is because the last volume and the first one are editorially totally different from each other, and the author's research on the first volume is by and large finished. As a result of his comparative research and analysis, he asserts that *Esopono Fabulas* (last volume) is editorially divided into two parts, and he has an immovable confidence that its original text is of the same kind *Aesopi phrygis et Aliorum Fabulae*, which is the 16th century's Aesop's fables in Latin.